

# 道徳

教えて！加藤先生

教えて！土田先生



千葉大学教育学部教授

土田 雄一

『小学道徳 ゆたかな心』(光文書院)監修

筑波大学附属小学校教諭

加藤 宣行

『小学道徳 ゆたかな心』(光文書院)監修

## 指導と評価の一体化を 見つめ直して

道徳科の評価は何のためにするのでしょうか。「子どもたちの学習状況の評価」をするとともに、「教師の授業評価(授業改善につなげる)」が目的です。そして、他者との比較ではなく、「認め、励ます個人内評価」をしながら、子どもたちの成長を支えることが道徳の評価です。

しかし、「働き方改革」の波のなか、道徳科の評価が「形骸化」していないか心配です。「通知表にどのように記述するか」ではなく、それまでにどのように関わるかが教師と子どもの評価です。成長を総合的に見取る「総括的評価」も大切ですが、プロセスで関わり、子どもの成長を見取る「形成的評価」を大事にしてほしいのです。一人一人に声をかけ、認めることも評価です。「子どもの成長を支える関わりができたか」は、「ねらいを達成する授業ができたか」と併せて考えたい「教師の自己評価」です。また、道徳科は自分の生き方を考える時間です。「子ども自身の自己評価」も大切にしたいですね。

これを機会に「指導と評価の一体化」について、もう一度見つめ直してみませんか。

## 指導と評価の一体化に つながるもの

学期末の道徳科の評価では、苦心された先生方も多いのではないのでしょうか。敢えて「苦心」という言葉を使ったのは、現場での温度差が未だにあるように感じられるからです。道徳の評価をどのようにしたらよいか分からない、形だけが先行してしまい、書きたいことを書くことができない、そもそも道徳の評価は必要なのか、というような疑問も根強く残っている気がするからです。

道徳科の評価に関しては、個人の変容を大きくりに、具体的に文章表記するといわれています。私は、指導要録と、いわゆる通知表では、その内容を書き分けるべきだと考えています。少なくとも子どもや保護者が目を通す通知表には、教師サイドの視点ばかりでなく、子ども目線の認め、励ます評価の表記を工夫したいものです。それこそが指導と評価の一体化につながるものではないでしょうか。

子どもたちが読み、「ああ、確かにここを頑張ったな。自分の意見をきっかけに、みんなの役にも立っているんだな。自分のためにも、もっと頑張ろう。」このような思いを子どもたちにもたせることができれば、評価も授業も、もっと楽しくなるような気がしませんか。